

震災文庫におけるデジタルアーカイブの取り組み：収集から公開まで

益本禎朗

神戸大学附属図書館

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 2-1

E-mail:masumoto@lib.kobe-u.ac.jp

概要

1995年に起きた阪神・淡路大震災を受けて、神戸大学附属図書館はこれまで震災資料の収集・公開に取り組んできた。18年にわたる震災文庫の活動について、デジタルアーカイブの取り組みを中心に紹介する。

キーワード

阪神・淡路大震災，震災資料，デジタルアーカイブ

1. はじめに

神戸大学附属図書館では、1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起きた後、早い時期から震災資料の収集を開始し、「震災文庫」として資料の一般公開を行ってきた。また、1998年からはデジタルアーカイブ構築にも取り組んでいる。

収集を続けてきた結果、現在、震災文庫には 50,573 件の資料が納められており、その10分の1にあたる 4,938 件がデジタル化・公開されている。(いずれの件数も 2013年2月21日時点)

本稿では、18年にわたる震災文庫の取り組みについて、その特徴と歴史を踏まえた上で、デジタルアーカイブ構築に関連した収集や許諾、公開、利用の実際を紹介する。

2. 震災文庫の紹介

2.1 震災文庫の特徴

まず震災文庫の大きな特徴として、収集資料の多様性が挙げられる。ひとくちに「震災資料」と言っても、市場に流通する図書・雑誌以外に、ボランティア活動のミニコミ誌や

個人で撮影された写真・ビデオなど、震災を契機にさまざまな資料が生まれた。震災文庫では、それら流通に乗らない資料も含めて収集しなければ震災時の被害や復興過程を捉えることはできないと考えたため、レジメやビラ、写真等も収集・保存の対象となっている。

もう一つの特徴は、収集した現代資料をデジタル化・公開している点である。震災文庫では、一般利用者への資料提供に加えて早期からインターネットを通じた資料公開を行ってきた。インターネット活用の背景には、収集資料の特殊性ゆえ他に保存されていない資料があること、またそれらの利用形態としてインターネットを通じた提供が適していること、などの要因が挙げられる。

これらの特徴は、「網羅的収集」「一般公開」「インターネットの最大限利用」という3つの方針として公開当初から意識されていたものである[1]。

2.2 これまでの歩み

阪神・淡路大震災関連の資料を収集・保存する活動は、現在、震災文庫の他に「人と防災未来センター資料室」や「兵庫県立図書館フェニックスライブラリー」「ながた人街資料室」などでも行われているが、そもそも震災直後から同様の取り組みはさまざまな団体で行われてきた [2]。

そういった流れの中、震災文庫の活動も震災発生からあまり間を置かずして始まっている。資料の収集は1995年4月頃から始められ、同年10月に公開開始、当時は「収書速報」として冊子・webの両方で収集資料の目録を公開していた。

そして、1998年頃から始まったのがデジタルアーカイブの取り組みである。1998年10月からチラシ等の「一枚もの資料」の画像データを書誌情報に添付する形で公開を始め、翌年7月に電子図書館システムの導入に伴って本文情報の提供も行われるようになった。

それから現在までは、資料の充実化以外では、収集資料の利活用と資料情報の共有化が大きな流れと言える。展示会(2004年、2009年)の実施や他機関と協力して資料の横断検索システム[3]の構築などに取り組んできた。

なお、東日本大震災関連では、震災直後に被災地への資料の無償提供(2011年3-5月)を行い、2012年2月には東北の被災地図書館と神戸の震災資料保存機関で情報交換会を実施している。また、2013年3月公開の「東日本大震災アーカイヴ」に震災文庫の資料情報も登録されるなどの動きもある。

3. デジタルアーカイブの取り組み：収集から公開まで

3.1 資料の収集

震災文庫は現在、資料の収集から閲覧対応等の全般的な業務に従事する担当者が一名お

り、その業務を図書館内の各係やワーキングチームがサポートする体制をとっている。

たとえば資料収集に関しては、インターネットや新聞、行政機関の記者発表等を通じて担当者が情報収集を行っているが、それとは別に、図書購入の担当係が資料選定のさいに震災関連の資料を見つければ、震災文庫担当者に知らされる形になっている。

以上のように情報収集を行った後、図書の購入もしくは発行元への寄贈依頼が行われる。

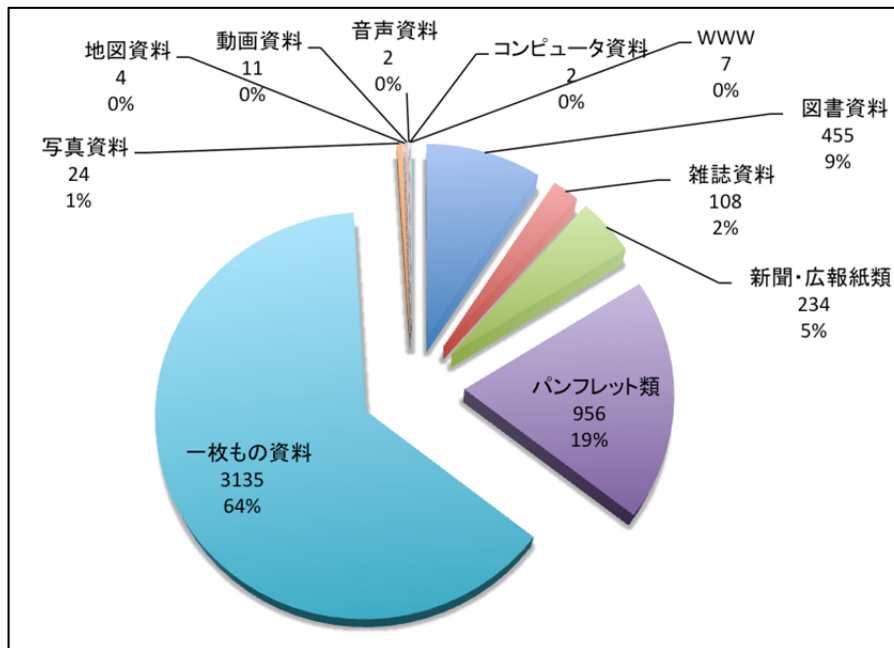
3.2 許諾の手順

資料のデジタル化に際しては、当然著作権への配慮が必要である。しかし、図書館が現代資料をデジタル化・公開する試みは、震災文庫がデジタル化に取り組み始めた時点ではほとんど存在しなかった。そこで、震災文庫のデジタルアーカイブ構築にあたっては、点字図書館で行われていた著作権処理を参考に許諾作業の流れが作られた[4]。

手順としては、まず収集資料の中から電子化するものを選別する作業が必要となる。選別に関しては、震災文庫の場合、特にチラシ、レジメなどの「一枚もの資料」を重点的にデジタル化してきた。これらの資料はほとんどが市販されているものではないため比較的許諾が取りやすく、また書誌情報からではどのような資料か分かりづらいため公開する効果が高いと考えられたからである。

次に、原資料やこれまでの資料情報等を確認して、著作権者の連絡先を調査、依頼文書一式（デジタル化許諾依頼文書、許諾を依頼する内容リスト、返信用はがき）を送付する。

その後、返信用はがきで回答があれば、はがきは永年保存とし、承諾の取れた資料についてデジタル化を行う。電子化作業は、「一枚もの資料」等の薄手の資料であれば館内の電子図書館係で処理し、図書など大部の資料であれば業者に発注している。



デジタル化資料の資料区分別件数・割合

No. _____

先般、神戸大学附属図書館より申し出のありました当該資料のデジタル化、およびインターネットによるデータ提供について次のとおり回答します。

・承諾します。
 ・承諾しません。
 ・一部分承諾しません。(no. _____)

* いづれかに○をつけて下さい。

平成 年 月 日

御住所 _____
 御芳名 _____ 印
 (団体および代表者名)

デジタル化許諾の返信用はがき

3.3 公開の方法

震災文庫のデジタル化資料にアクセスする方法は、およそ二通りに分けることができる。ひとつは、資料検索システムで検索し検索結果の書誌情報から参照するやり方である。検索結果の書誌情報の横に一次情報を示すアイコンが表示され、それをクリックすればデジタル化資料を閲覧できる。

二つ目は、デジタル化資料をまとめて一覧にした「デジタルギャラリー」というページ

から利用する方法である [5]。「デジタルギャラリー」では、まず写真や図書など資料種ごとの分類がなされているが、それぞれの資料を個人や団体など資料提供者ごとの「資料群」としてまとめている点が特徴である(但し、図書のみ分野別に分けている)。そのため、公開にあたっては、資料提供者の意向を反映させてページのレイアウト・構成等を行うケースもある。

加えて、撮影地が判明しているデジタル化写真は、地図から検索することも可能になっている。

動画資料のデジタル公開

これらのビデオ映像は、「神戸ビデオクラブ」、「明舞ビデオクラブ」会員の皆さんや、個人の方からお寄せいただいたものです。
※ご覧いただくにはプラグインが必要です。

 <ul style="list-style-type: none">阪神大震災の記録 (1995年1月17日-2月11日)撮影：白井弘一	 <ul style="list-style-type: none">阪神・淡路大震災直後とその後 (1995年1月17日-6月10日)撮影：谷通好	 <ul style="list-style-type: none">震災記録映像 (1995年)撮影：藤原佐多和
 <ul style="list-style-type: none">震災記録映像 (1995年1月27日, 2月22日)撮影：井崎正也	 <ul style="list-style-type: none">震災記録映像 (1995年1月26日-2月19日)撮影：古田剛	 <ul style="list-style-type: none">震災記録映像 (1995年2月-12月)撮影：河田道弘

動画資料のデジタル公開画面



地図を使った写真検索の画面

3.4 デジタル化資料の利用

これらデジタル化した資料の利用については、個別のアクセス・ログを取得していないので正確な数が分かっているわけではない。

ただ、資料を二次利用する場合は、資料ごとに利用の許諾条件が異なるため、事前の問い合わせを求めている。問い合わせの際に利用者や利用目的を明記してもらっており、利用実態の一部を把握することができる。

問い合わせの件数は、2008～2010年までの3年間では約60～70件あり、東日本大震災が起きてからの最近2年では約30件超となっている。

利用希望のある資料はほとんどが写真で、使用目的としては行政機関による防災関連の会議資料・広報誌への掲載が多い。他に住宅メーカー等の耐震、学校での防災教育、報道での記事掲載などの目的でも利用されている。

4. 終わりに

震災アーカイブの構築にあたっては、資料収集や許諾など地道な活動が必要になる。また、デジタル化資料の提供方法や情報の共有化などは今後も大きな課題だと考えられる。震災文庫の取り組みがひとつの事例として参考になれば幸いである。

失われたものを確認するための記録、また残されたものとしての記録。それら資料自体の価値を踏まえ、さまざまな震災アーカイブの取り組みが進展していくことを願っている。

参考文献

- [1] 渡辺隆弘 「震災記録を収集・保存し,将来に役立てる : 神戸大学「震災文庫」の10年」
『図書館界』 vol. 57 no. 2(通巻 323 号): 73-77, 日本図書館研究会, 2005. 7.
- [2] 稲葉洋子 「阪神・淡路大震災と図書館活動 神戸大学「震災文庫の挑戦」
- [3] 震災資料横断検索 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/crosssearch.html>
- [4] 稲葉洋子 「神戸大学「震災文庫」の新たな役割」情報管理 vol.55 no.6 p.383-391
- [5] 震災文庫 デジタルギャラリー<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/dlib/index.html>